関門海峡ミニボーダーツーリズムに参加しました

JCBS 理事　高田喜博

NPO 法人国境地域研究センター（JCBS）が、2024 年 5 月 25 日（土）に開催した「関門海峡ミニボーダーツーリズム」に参加して門司港と下関を歩いた。地理的には日本海と瀬戸内海のボーダーに位置する関門海峡（下関海峡、馬関海峡、穴戸海峡）は、現在は九州の福岡県と本州の山口県の県境であり、律令制の時代は西海道の豊前国と山陽道の長門国の国境（くにざかい）であり、さらに日本海（玄界灘）を挟んで朝鮮半島や大陸など東アジアとの国境であった。そうした各種ボーダーの痕跡を探して歩く旅であった。

この日は晴天に恵まれ、途中で多少の出入りはあったが総勢 16 名（小学生 3 名を含む）で、とにかく歩いて、しっかり学び、いろいろ話をして、美味しく食べて、充実した一日を楽しむことができた。

門司港駅

ツアー本体は小倉駅から門司港駅に移動した。私（筆者）は 9 時 20 分に門司港駅でこれに合流、さっそく JCBS 理事長の田村慶子さんの案内で門司港駅構内を散策した。

鉄道が開設されたのは明治 24（1891）年、当時は九州鉄道の起点駅であり門司駅と呼ばれていた。その後、昭和 17（1942）年に関門トンネルが開通して、接続点となった大里が門司駅に改称され、当駅は門司港駅に改称された。

現存する駅舎が完成したのが大正 3（1914）年だが、百年以上も経た平成 31（2019）年から 6 年に及ぶ修復工事がなされて大正時代の姿に復元された。現役の駅舎で国の重要文化財に指定されているのは東京駅と門司港駅のみだという。田村さんの案内で、その堂々としたファサード（正面）や繊細な屋根の鉄骨などや、ようやく本国へ帰り着いた引揚者や復員兵が安堵の思いで喉を潤した「帰り水」、戦時中の金属供出をまぬがれて残った「幸福の手水鉢」などを見て歩いた。

関門海峡ミュージアムとその周辺

次に、関門海峡に関する歴史や文化などを展示する「関門海峡ミュージアム」へ行った。まずは展示室の入口がある 4 階まで行くと関門海峡を一望することができた。親切なガイ

ドさんの案内で、4 階まで吹き抜けのホールに設置された巨大なスクリーンで関門海峡に関する映像に始まり、関門海峡の歴史、例えば源義経が活躍した壇ノ浦の合戦、ザビエル来訪、宮本武蔵と佐々木小次郎との巌流島の決闘、四国連合艦隊と戦った馬関戦争などを創作人形などで展示するコーナーなどを見て歩いた。これからの関門海峡散策の予習としては最適の施設であった。

このミュージアムの南側の「大連通り」と呼ばれる道路を挟んで向かいには、昭和 4(1929)年に建てられた「旧大連航路上屋」がある。国際航路のターミナルビルだった建物で、往時は岸壁に面していた。すなわち「大連通り」は海で、このミュージアムは埋立地に建つのだ。実際に道路に沿ってビット（船を係留する柱）が並んでいた。こうして、このミュージアムの建物は、海に浮かぶガラス張りの帆船をイメージしたということがようやく理解できた。

また、ミュージアムから駅に向かって歩いて行くと右手に「門司港出征の碑」と「軍馬の水飲み場」がある。日本が侵略戦争をしていた時代、この門司港 1 号岸壁から大陸や南方へ 200 万人を超える将兵が出征し、これと共に 100 万頭もの軍馬も出ていった。そして、多くの将兵とほとんどの軍馬が帰ってこなかった。そういう歴史を記録するものである。

門司港駅構内に残る帰還者・引揚者の人たちが「安心水」を飲んだ水道。

門司港駅の近くにある「門司港出征の碑」隣には「軍馬の水飲み場」の跡もある。

下関に上陸して唐戸市場へ

駅周辺の「門司港レトロ地区」をしばし散策してから関門連絡船の桟橋へ向かう。ちょうど「門司みなとまつり 2024」と重なったため、観光客で混雑する連絡船で下関側に渡る。

下関の連絡船桟橋で、下関側の案内人である下関市生涯学習プラザ館長の久保伸子さんと合流した。久保さんは JCBS が発行するブックレット・ボーダーズ 10『知られざる境界地域やまぐち』の執筆者の一人でもある。

ちょうどお昼の時間なので、まずは「唐戸市場」まで案内してもらった。「唐戸市場」は、一見は巨大な観光施設のように見えるが、基本的には大正 13（1924）年に隣接する阿弥陀寺町から移転してきた卸売市場であり、そこに直接販売の店や飲食店などが併設された。「関門の台所」と言われ、手軽に美味しい海鮮を食べることができる。

関門連絡船は通常は 20 分おきに出港し数分で対岸に到着することができる。

関門海峡（馬関海峡）は潮流が早くてまるで大河のように見える。

朝鮮通信使上陸淹留之地の碑

昼食の後は、いよいよ久保さんの案内で下関側のミニボーダーツーリズムがスタートした。まずは阿弥陀寺町の「朝鮮通信使上陸淹留之地の碑」（淹留／えんりゅう＝長く滞在すること）へ。江戸時代に朝鮮国王の国書を携えて来日した通信使のうち、最後を除く 11 回が下関（赤間関）を経由し、この付近から上陸して赤間神宮（当時は阿弥陀寺）を宿舎とした。われわれのボーダー仲間（境界自治体）である対馬市との関係が深い朝鮮通信使に関連するモニュメントであるため、後日、1719 年に第 9 回朝鮮通信使の製述官（書記官）として来日した申維翰の記録・紀行文である『海游録』（東洋文庫 252）を調べてみた。関連する部分を意訳すると「新築の宿舎が精妙で華麗である。見物の男女の服装もまた華艶であり、

巷の商店も爛然とし、赤間関もまた海門の一都会である」と記されている。

赤間神宮から日清講和記念館へ

竜宮城を思わせるデザインの赤間神宮には、壇ノ浦の合戦で平氏が滅亡する最中、わずか8歳で入水した安徳天皇（平清盛は外祖父）が祀られている。明治の神仏分離までは阿弥陀寺であり、境内には平家一族の墓である「七盛塚」や小泉八雲の『怪談』で有名になった耳なし芳一の「芳一堂」ががる。

隣接する安徳天皇阿弥陀寺陵の前を通って西へ歩くと、明治 28（1895）年 3 月 20 日から 4 月 17 日まで、日清戦争後の講和条約交渉が行われた「春帆楼」とその資料を展示する「日清講話記念館」がある。記念館の中では久保さん手作りの資料を見ながら、清国側全権の李鴻章が交渉中に暴漢によって顔面を銃撃された事件などを含め、この地で行われた交渉について説明を受けた。

個人的には、外務省 HP に領有権の根拠として最初にあげられている「日本政府は、1895 年 1 月、他の国の支配が及ぶ痕跡がないことを慎重に検討した上で、国際法上正当な手段で尖閣諸島を日本の領土に編入しました」の日付が、この講話条約交渉が開始される直前で

あることが気になる。

日清講話記念館

亀山八幡宮から旧下関英国領事館へ

少し西へ歩いて、巨大な高石垣の上にある亀山八幡宮の前まできた。久保さんは鳥居の横にある「山陽道碑」を指し、ここには海に面して山陽道が通り、その先は海であったことを教えてくれた。現在、山陽道は五車線の国道 9 号線となり、その海側は大きく埋め立てられて唐戸市場などの巨大施設が建ち並んでいる。そうした変化の中で歴史散歩をするには、頭の中で往時の姿を想像しながら歩くことが重要となる。

次に案内されたのは明治 39（1906）年に建てられた旧下関英国領事館であり、現存する最古の領事館建物（国指定重要文化財）だという。この建物も、現在は国道 9 号線に面して海から少し離れているが、往時は亀山八幡宮と同様に旧道を隔てて海に面して建っていた。その証拠だと言わんばかりに、建物の目の前に海が描かれたスケッチを館内で見ることができた。

歩き回って少し疲れたので、各自でコーヒータイムをとることになった。私は一人で気になっていた、亀山八幡宮に上ってみることにした。幕末の攘夷戦争の時、長州藩は関門海峡（当時は馬関海峡）にいくつもの砲台を築いたのだが、その一つは亀山八幡宮の境内に設置された。なるほど、久保さんの説明のように、当時は海に面した高台であったとすれば砲台建設の好立地だったはずだ。境内の海に面したところに「亀山砲台跡」の解説板があり、それには「文久 3（1863）年 5 月 11 日午後 2 時久坂玄瑞の指揮によりアメリカ商船攻撃合図の砲弾が亀山砲台から発射され…馬関攘夷戦の火ぶたがきられた」とあった。この戦いは、後に四国連合艦隊との馬関戦争へと拡大する。

山口銀行旧本店（やまぎん史料館）から旧下関駅界隈へ

一行は再び集合して久保さんを先頭に歩き出した。明治 33（1900）年に建てられ、現役の郵便局舎としては日本最古といわれる「下関南部町郵便局」（“南部”は“なべ”と読む）の前を通り、「山口銀行旧本店」に向かった。もともとは大正 9（1920）年に三井銀行下関支店として建築されたもので、県指定有形文化財となっている。ここでは係の方が親切に案内してくれて、ギリシア建築を思わせる外観、カウンターや亀甲タイルの床や金庫がある内部、そして通常は立ち入ることができない 2 階の頭取室や応接室まで見学することができた。

さらに現在の下関駅方面に向かって歩いてきたが、その手前で久保さんは一行を市営細江町駐車場の 6 階にある展望台に案内した。ここから見下ろす通りが旧下関駅（開業当時は馬関駅）の駅前通りであり、かつては左手（南側）の港に面したところに駅舎が建っていた（前出ブックレット 48 頁の写真参照）。そして、右手の現在は更地になっているところを指して、ここには国内初のステーションホテルであった山陽ホテルの木造洋館が建っていたと説明してくれた。

近代になってからの下関は、この旧下関駅を起点とする「関釜連絡船」など、朝鮮半島および大陸に渡るための結節点として発展した。そうした発展の背景には、江華島事件、日清・日露戦争とその後の韓国併合、満州事変と満州国の成立、日華事変と大陸侵攻、太平洋戦争とアジア侵略、敗戦と引揚や帰国という日本の帝国主義戦争の歴史と連動していた（詳しくは前出ブックレット 48 頁以下参照）。

おわりに

われわれのミニボーダーツーリズムは、下関駅近くにある「関釜 関門航路 下関鉄道さん橋跡の碑」で終わった。関門海峡を巡る長くてぶ厚いボーダーの歴史や文化を、田村慶子さんと久保伸子さんの案内で、一気に駆け抜けたというような一日であった。お二人に感謝すると共に、ボーダーの歴史と文化は貴重な地域資源だという思いを強くした。

最後は、久保さんに地元の人気店ろばた焼き「まんなおし」（“まんなおし”は縁起なおしの意味）に案内してもらい、皆で下関の美味しい魚や料理や酒を堪能した。そしてホテルへ戻るとスマホの万歩計は 2 万歩を越えていた。